



表紙 仏華
石川 真樹 [茨城1組 福法寺]

花材 ハラン、トルコキキョウ、
カーネーション、小菊、
アレカヤシ



Shinran 500th
南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

—〈2023年 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年 慶讃テーマ〉—

東京教区教化委員会報 ネットワークナイン

発行日 2021年7月1日

編集 教化委員会広報・出版部門

「ネットワークナイン」班 編集員
総編集長：本田 彰一（東京1）
チーフ：中村 晃（茨城1）
佐々木誠信（東京4） 朝倉 俊隆（東京5） 五島 大地（東京8） 大山 信敬（茨城2）
チーフ：田上 翼（茨城1）
坂東 性悦（東京2） 平松 正宣（東京3） 櫻田 純（東京6） 秦 顕生（湘南）
チーフ：田宮 真人（東京8）
内藤 友樹（東京1） 渡邊 尚康（東京3） 相馬 法道（茨城1） 鞠川 卓史（湘南）

発行 真宗大谷派東京教区教化委員会
〒177-0032 練馬区谷原1-3-7東本願寺真宗会館
TEL. 03-5393-0810 FAX. 03-5393-0814 Email. nw9@ji-n.net

ご意見、ご感想は上記連絡先までお願いします。

もくじ

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業

南無阿弥陀仏は

こころに花を咲かせ、

その種がまた

●03 南無阿弥陀仏を生む 白山 勝久

特集 新表紙インタビュー

●05 仏前に花をそなえる 石川 真樹

●11 法語ポスター

教区教化通信 同朋の会推進部門

●12 真宗門徒 春のつどい 溝口 久美子

教区教化通信 研修部門

●13 新教師のつどい 稲垣 和弘

教区教化通信 研修部門

●14 秋安居報告③

教区教化通信 「同和」協議会

●16 第3回部落問題基礎講座を受けて 蒲 義道

教区教化通信 教学館

●17 私の出遇った言葉 本多 敬有

はい！こちら真宗会館です

●20 駐在日記 渡邊 誉

はい！こちら真宗会館です

●21 所員のつぶやき 渡邊 楽

●23 敬弔・涌 中村 晃

南無阿弥陀仏

人と生まれたことの意味をたずねていこう

南無阿弥陀仏はこころに花を咲かせ、

その種がまた南無阿弥陀仏を生む



教区慶讃事業企画運営委員／本山慶讃法要
テーマに関する教学検討委員会委員

東京5組 西蓮寺 白山 勝久

慶讃法要テーマに関する教学委員会（本山）
にお声がけいただき、慶讃テーマの検討に携
わりました。2018年9月から2019年

3月に亘り、公式会議7回、自主会議2回、
1泊2日の合宿1回を経て、慶讃テーマは誕
生しました。

毎月の会議時、京都駅から宗務所やしんら
ん交流館への道中、ご本山の築地塀に掲げら
れている、先の慶讃法要スローガン「生まれ
た意義と生きる喜びを見つけよう」が目に入
ってきます。このスローガンを経て、現代に
おいてどのような言葉に出会えるのだろうか
。ドキドキワクワクの半年余りでした。コ
ロナ禍の今にしてみれば、テーマ委員が毎月
京都に集まり、生のやり取りで会議を持てた
ことをとても有り難く思います。テーマ決定
を前にコロナ禍に突入し、リモートで会議を

重ねていたならば、まったく異なるテーマと
なっていたことは当然ですが、恐らくテーマ
委員みんなが納得いくテーマに辿り着くこ
とはなかったかもしれません。テーマ委員6
人で、全員一致のテーマを提出しよう！とい
うことを約束していたので、最後の最後、ギ
リギリまで話し合いました（その分事務局に
ご迷惑をおかけしたのですが、辛抱してお待
ちいただき感謝申し上げます）。

テーマ委員会では、「居場所の喪失」という
ことがキーワードとして上がりました。多く
の人が不安を、寄る辺なさを抱えている現代。
「私は、ここにいていいんだ」ということを
表現できたら…。そこからテーマを紡ぐ旅が
動き始めた気がします。テーマに関するお話
は、本年10月15日開催の「慶讃法要の意義
を学ぶ研修会」でお話をさせていただくこと
が決定していますので、この誌面上では割愛
させていただきます。10月15日、ぜひお聞
きください！

テーマ委員の依頼をいただいてから、そも
そも親鸞聖人の「御誕生」と「立教開宗」と
はいったいなんだろう？ということを自問
自答しました。

2023年にお迎えする「宗祖親鸞聖人御

誕生八五十年・立教開宗八百年慶讃法要」。
この法要は、親鸞聖人のふたつの出来事「御誕生」と「立教開宗」を祝う法要ではない。「御誕生・立教開宗」を慶讃する法要であると思に至りました。

人間親鸞の誕生がなければ、親鸞自身が教えに出会うことはありません。ということは、念仏の教えが現在に、私に伝わるということもありませんでした。人間親鸞が誕生し（御誕生）、悲喜（こも）もの人生を生き、法然上人に出会い、その教えに聞き、生涯をとおして念仏申す生活をされました。聖人は『顕浄土真実教行証文類』をはじめとして念仏の教えを数多く著わされます（立教開宗）。けれど、教えは、聞く人がいてこそ教えとなります。親鸞の教えを聞き、「南無阿弥陀仏」と念仏を称える人びとの誕生があったからこそ、宗祖としての親鸞聖人が誕生しました。人間親鸞の誕生、教えを説き著わす、教えに聞く人びとの誕生、宗祖としての親鸞聖人の誕生、念仏が伝わる…御誕生と立教開宗とは、ふたつの出来事ではなく、ひとつの大きな循環として見えてきました。その循環は現代（いま）に広がり、その中に「私」もいます。

「御誕生・立教開宗」は、生命の循環に重

なります。種から芽が出て花が咲く。たとえその花は枯れてしまっても、種を残し、その種からまた芽が出て花が咲きます。そのように、聖人の教えに出会った人は、念仏を称える人となります。念仏を称える姿は、次を生きる人びとへと伝わってゆきます。教えを聞いた「私」が、教えを伝える「私」になりま

す。「御誕生・立教開宗」の慶讃法要をお勤めするということは、私にまで念仏の教えが届いていることの確認・自覚のための法要です。たずねていく歩みとは、答えを見つげるための歩みではなく、先達の大切にされた念仏の教えを、私もまた聞いていく歩みです。

南無阿弥陀仏

今後の慶讃事業予定

・慶讃法要の意義を学ぶ研修会

【期日】2021年10月15日（金）午後から

【お話】白山勝久氏（東京5組 西蓮寺）

教区慶讃事業企画運営委員／慶讃法要テーマに関する教学検討委員会委員

酒井義一氏（東京5組 存明寺）

教区慶讃事業企画運営委員／宗務審議会「慶讃法要基本計画に関する委員会」会長代理「教学・教化に関する小委員会」主査

※開催方法につきましては、あらためてご案内いたします。

・教区慶讃法要お待ち受け大会

【期日】2022年6月13日（月）

※開催方法、内容につきましては、あらためてご案内いたします。

仏前に花をそなえる



茨城1組 福法寺 石川 真樹さんに聞く

今号より一年間に亘って各号に合わせた季節の仏花を立てて頂き『ネットワーク9』の表紙に掲載します。そこで仏花を立てていた石川真樹さん（茨城1組 福法寺住職）に、オンラインにて取材を行い、仏花についてお話しを聞かせて頂きました。

今回、仏花を題材にした特集にすると聞いた時、私の中でどのような話が展開されるのかと気になっていました。石川真樹さんのように仏花を一から自分の手で立てられている住職や坊主もおられるという話はよく聞いていたのですが、それを聞くと花を立てた事がない私にとっては、相当な手間が掛かってさぞかし大変ではないかという印象が今までありました。そんな私の個人的な問いを持って話を伺いましたが、仏花に対する思いと情熱が伝わってくるそんな取材になりました。

表紙に掲載されている仏花を様々な角度から撮ったことで、普段は見ることのない角度や立体感、そして四季を取り入れた花などを皆様にはご覧いただきつつ、今回の特集を読んでもいただければと思います。

（編集員…五島 大地）



茨城1組 福法寺 石川 真樹 氏

「石川さんが仏花に出会われたのは、どんなご縁だったのですか？」

私が仏花に出会った経緯は、お寺に戻って自分自身で何から始めていこうかなと考えたことです。自分がやれることや好きなことから始めようと思った時に、物を作ったり、絵を書いたりするのが好きだったので、仏花に至ったというのがきっかけですね。最初は先人たちの真似をしていましたが、次第に自分で考えるようになってきて、そこから「どうしたらいいのかな」と自分の中で模索するようになりました。例えば組内のお寺さんの法要にお手伝いで行った際や、何かのご縁で見たり聞いたりしていく事から真似をしていく

というのがスタートだったと思います。そこからやり方だけではなく、そもそも仏花って何のためにやっているんだろうと考えるようになっていきました。教区報恩講や組内の同朋大会を通して、実際に仏花を立てている人たちと関わりながら、仏花のことについて考えるきっかけが生まれたことは、すごく大きいと感じます。

仏花に携わる中でそれぞれが苦労されてやっている現実と、自分でやっていることを確認する場が非常に少ないということをすごく感じました。例えば声明なら声明を習う所があったり、教学なら教学を学びたいと思った時に学びを確かめる場所が多いと思うんですが、昔から大切にされてきた仏花であるにも関わらず、なかなか公で確認する場が少ないと感じました。仏花を研鑽する場が少ないと、研鑽したいと思う人がそれぞれ努力しているのに、そこから先に一歩踏み出すのが難しいとすごく感じています。

私が教区報恩講のお花を立てるようになってからの担当の方から「これをもっとオープンにしちゃおうよ」と言われ、「どう作っているのか見学できますよ」と広報をしていただきました。それまでは広く告知する場や、どの

様にやっているのかを見る機会もなかったというのが現実かなと思います。

「教区報恩講の仏花は石川さん一人で立てられているのですか？」

最初に担当したときは、自分で立ててみたいとわからないことが多かったので一人で立てました。次に頼まれたときは、一人では大変だなと感じて、相談できる人を見つけてお願いをしました。例えば、お花屋さんだったり、普段からお花をやっているご門徒さんなどです。私の町はお寺が多いのでお花屋さんも多いんです。お花屋さんもそれぞれに色々なキャラクターがあって、普段から変わったお花が置いてあったり、こういう花材がほしいということに対して、応えてくれるお花屋さんがあったりします。いろんなキャラクターがあって、うまくお付き合いをしながらやらせてもらっています。教区報恩講は、期間が長いのとエアコンによる乾燥がづらいですね。冬場は特に乾燥しているので、乾燥対策を考えながら花材を選んだりしています。ただ、そこに一つ問題があって、極論を言えば長持ちさせるだけなら、造花を使えばいい

いんじゃないかって話になるわけです。ただ造花ではやはり、そこに学びがないというか、あえて生きた生花を使うことによって、私たちはそこから学ばせてもらうようなことが存在すると思います。時間を置くと最初は蕾だったものも花が咲いて、いずれは枯れていくという、自分たちの生き死にを表現できる、本堂の中で唯一の部分であると言う人もいます。そこは造花では表現できないのです。いつまでも同じ緑だったり赤だったり、変化することがありません。便利とか手間を考えたら、造花を使う事が考えられてくるけれども、長い歴史の中で引き継がれてきたということは、そこに何か学びがなかったら、今まで続いてこなかったのではないかと思います。各尊前にお花を生けるというのは、真宗独特の文化と言っているのかわからないですけれども、他宗にはなかなか見られない部分です。他宗の本堂を見ると、蓮の花の作り物が置いてあるだけで、ご法事の時にご法事をされる人が花束を持ってきて、花束をどんと置いて終わらしてみたいな印象が強いので、それとは違うんじゃないかなとすごく感じますね。

「石川さんは仏花に洋花も使われますね。洋花を使う理由をお聞かせください」

私が仏花をやっていく中で、最初に基本としていきたいこと、根っことして押さえておきたいことがあるんです。数年前に東本願寺から『真宗本廟の仏花』が出版されましたが、そのなかに「東本願寺の仏花」について少し書いてある文面があるんですね。これには元になっている文章があつて『東本願寺の仏花』（絶版）の中にほぼ同じような文章があります。本山との関わりが深い「花小商店」の14代目の田中小兵衛さんという方が書いているのですが、この文章を現代風に直したのが『真宗本廟の仏花』の文章です。

そこには造花とか洋花などは使わずに、四季折々のお花を使いましょうということが書かれています。この本が出版されたのは1985年（昭和60年）で、書かれた当時のことを考えると、洋花というものはとても高価だったと思うし、時代的にも高価な洋花を使うことは難しかったのではないかと思います。しかし金銭的な部分で云々というわけではなく、あまり手に入りづらいものは扱わずに、身近なもので十分やることができますよ、

というのが根本にあつたのではないかと思います。現代では、特殊な物を除けば、和花も洋花も変わりなく手に入りますので、特に分け隔てなく使っています。もうひとつ思うのは、洋花であろうと和花であろうと、花そのものが持っている「いのち」に変わりはないと私は思っています。加えて歴史的なことを言えば、一般的に香りの強いものや棘のあるもの、蔓つるに咲く花など、使いつらい花はあまり適さないと文献の中で言われてきたことではあります。そういうことから推測すると、昔は洋花とか和花と分けていた事が、現在ではあまり区別しなくていい部分になってきたのではないかと思います。根本的には洋花であろうと和花であろうと、同じ一つの「いのち」であつて、そこに仏花という中で表現し



なければならぬことを考えてみると、あえて差をつけずに使っていていいのではないかと私は思っています。

強いて言うならば、和花とか洋花と言つて選んでいるのは私たちの側の問題なのではないかなと感じます。自分がそういった分け隔てる思いを持ちあわせてやっているのかなと感じる所があつて、あえて洋だろうが和だろうが垣根なく使わせてもらっているわけです。

今回の掲載号の表紙についてお聞きします。

この7月号に限らず、気を付けたことは、あまり特別な花材を使わずに立てさせてもらったところと、あまり変わった花材を使つてしまうと、平生と掛け離れて「特別なもの」になってしまう。そうならない様に誰でも手に入るような花でも、こういうことができるということをお伝えしたいという思いでやらせてもらいました。花材は全部、近所のお花屋さんやホームセンター、庭先に咲いていたものなどを使いながら、一年分の表紙のお花を立てさせていただきました。

11月号の表紙の大輪の菊だけは特別なもので、ご門徒さんが1年かけて育ててくれた

菊を使わせてもらっています。その方に話を聞いたのですが、菊を育てるには、土作りから始め、1年間ずっと手をかけてあげないと、なかなか菊はうまく育たないそうです。そんな手塩にかけた大輪の菊を使わせて頂けるのはありがたいことです。しかし菊を育てる方も年々減ってきています。そういうことも次につなげられる様な機会や、人が育っていないというのが現実です。致し方ない部分もあるのかなと思いますが、非常に残念なことです。

私たちが仏教を学んでいくというのは、いままでの思い込みの部分を頭からしていくということがあると思います。仏花を通して、も仏さまの願いを聞く機会や場が今現在まで繋がってきているのではないかなと思います。一年間の表紙掲載で、人の育成という意味でも見てくれる人の何かのきっかけになってくれれば幸いと思い、それだけで頑張らせてもらいました。

「お内仏のお花についてお聞かせください」

ご門徒さんにお伝えしていることは「お内仏には、庭先に咲いている花でもいいので、



お内仏の仏花例

お花を入れてください」ということです。何かかまどめてそこに合うサイズに入れてください。難しく考えずに分からなくなったらお寺の本堂を見たり、ご住職や坊守さんに聞いたりしていただけたらと思います。出来たら京都のご本山もお参りしてほしいですね。現実的には大きさもあるので同じようには難しいのですが、本山の仏花を自宅のサイズに落とすことだのが、ご自宅のお内仏の花です。最終的に大切にしてほしいことは「お花を絶やさずに入れてほしい」ということです。



「石川さんのお寺ではお花講をされていると聞きました。お花講とはどんなものですか」

お花というものを一つのきっかけとした人の集まりと言ったらいいのかな。福法寺の場合だと報恩講に向けて、一人に一杯づつ花立てをお願いしています。出来上がったら記念撮影をしてお茶を飲んで、翌日に私が本堂にお飾りしています。もちろん、出来不出来は二の次の部分です。最初は生け花を経験されている人や、フラワーアレンジメントなどをされている方にお声掛けしました。一緒にや

りながらお話をするきっかけのひとつとしてお花を立てています。しかしメンバーの高齢化や新型コロナウイルスの影響もあって、やる人自体も少なくなってきました。なかなか次の世代にバトンタッチが出来ない悩みもあります。

「つらかったことなどはありましたか？」

最初の頃は好きだから、しんどい思いながらもやっていただけで、それはそれでなんとなくいいのかなと思っていました。確かに夏場は頻繁に水を変えなければならぬなどの苦勞もあります。でもたまにふっと「なんでこんなに一生懸命やっているんだろうな」とそもそも立ち返る時があるのです。なんでこれを一生懸命やっているのだろうなと思いつつ、「うーん…」と自分で自分の事を考えながらやるような。

最終的には私たちが携わっている仏花とは、花を生けて飾って終わりではなく、お荘厳の中のひとつなので、決して生けて良かったとか、出来不出来で評価される部分ではないのだと思います。しかし往々にしてちよつと小綺麗にできた方が良いとなりがちです。結局最終

的に出来不出来みたいところに留まってしまいう自分もきつと嫌なのです。

私の中でお花をやっているすごく大切にしたいところが、前述の『真宗本廟の仏花』にも書いてありますが、全体の調和という部分だと思ふんです。私たちがやっていることは全て「浄土の荘厳」で、仏花はその一部です。

例えば報恩講だったら報恩講ということの調和。花だけが目立っていたらいいのかわからないことでもなくて、花もあってお勤めも出来てお話しも聞いて、ひとつの報恩講というお話が動まってはじめてなのかなと思います。やはりそこかなと私は常々、自分で思いながらやっています。

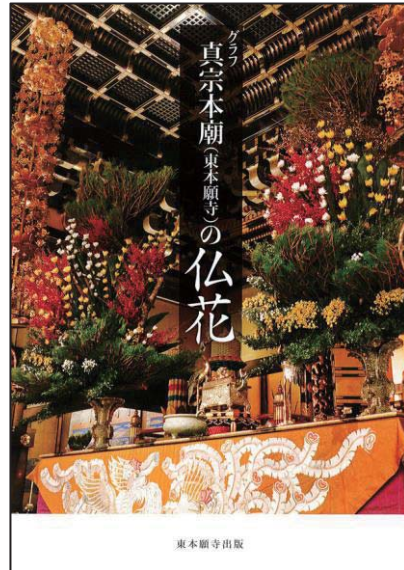
また、仏花について何かあれば、まだまだ力不足ですが気軽に相談して下さい。

「石川さんにお話を聞かせていただいて、非常に仏花に対して丁寧に向き合われていると感じました。報恩講も声明やお花や法話という調和を目指していたはずなのに、一つ一つに追われるあまりバラバラで調和を見失っていた自分に気付かされました。ありがとうございます。」
（取材：中村班（旧朝倉班））

『グラフ 真宗本廟（東本願寺）の仏花』
花小商店 著 880円（税込）

四季折々の花材を用いて立てられる仏花を写真で紹介するオールカラーの写真集。

御影堂や阿弥陀堂に荘厳される仏花を四季ごとに写真で紹介しているほか、大谷祖廟の平常時と報恩講時の仏花も収載しています。巻末には、仏花の立て方を順追って写真付きで紹介する「仏花の生け方」も掲載しているので仏花を立てる際の参考書としても最適です。



関連書籍等紹介

書籍のご購入を希望される方は、東京教務所までお問合せください。

☎03-5393-0810



『真宗の仏事—お内仏のある生活—』
550円（税込）

真宗大谷派の仏事を学ぶ基本書。お内仏の荘厳の仕方からおつとめの作法、報恩講をはじめとする定会法要（年中行事）まで、今さら聞けない仏事の基本を写真入りで解説するとともに、お内仏にお給仕をすることの意義、私たちに願われていることを共に考えていく、真宗門徒必携の一冊です。



立体感のある仏花の立て方

坊守さん方の仏花学習会からコツをご紹介します（岡崎別院）

[しんらん交流館ホームページ](#) > [お寺 de お役立ち](#) > [その他](#) > 立体感のある仏花の立て方

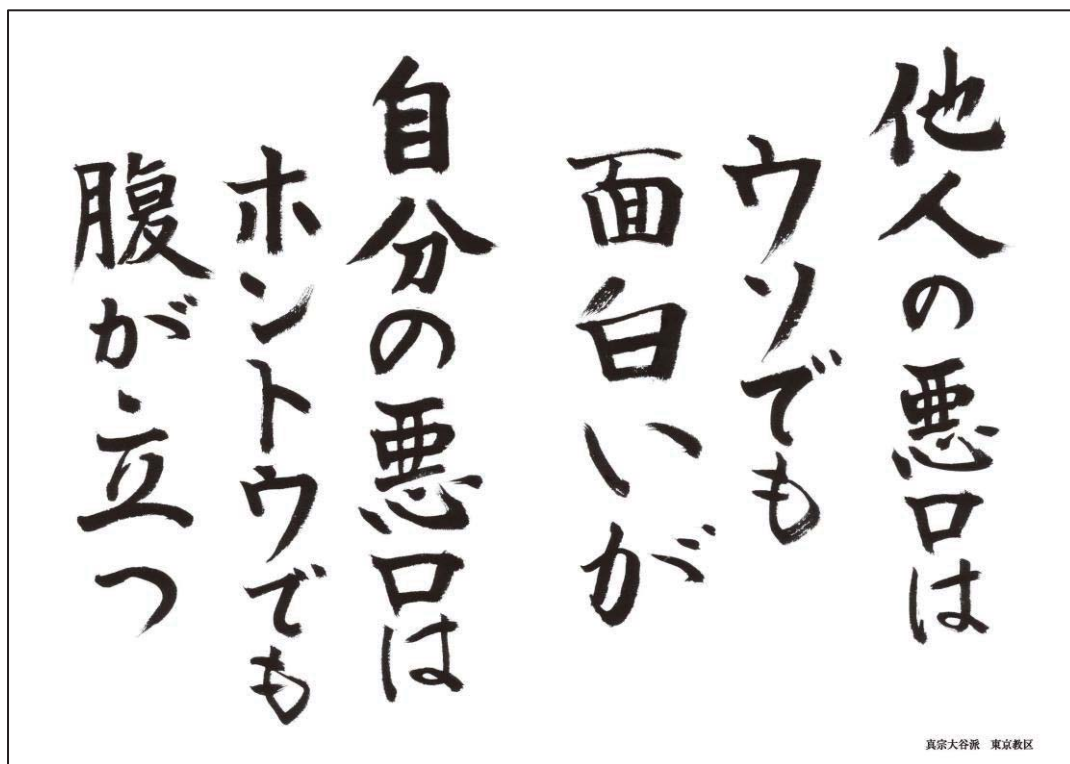
しんらん交流館のページに仏花の立て方のページがあります。これは京都教区の山城第1組・山城第2組の坊守さん中心にして岡崎別院にて開催している仏花学習会「はちす会」協力によるページです。写真や図解・動画による説明などがあります。

（2021年6月現在）



上記ページURL
QRコード

今月の法語



書：佐藤 多仙

- ・頒布中「掲示伝道用ポスター」(A2 サイズ)
「掲示伝道ポスターミニ」(ポストカードサイズ)
- ・「掲示伝道用ポスター」が貼れる門徒宅用掲示板を無償設置いたします。
詳細は東京教務所まで。

教区教化通信 同朋の会推進部門

真宗門徒 春のつどい

テーマ：「この世は〈私一人〉を教育する阿弥陀さんの学校なり」
講師：武田 定光氏（東京6組 因速寺）



同朋の会推進部門委員

山梨組 佛念寺門徒 溝口 久美子

新型コロナウイルスの脅威の中、当初は3日間で予定されていた講座を変更し「真宗門徒春のつどい」として、3月24日に半日開催となりました。江東区因速寺住職の武田定光先生にご出講いただき、真宗会館とオンラインでの開法となりました。

マイクの具合が悪く、やや聞き取りにくかったことに焦っておりました。お話の全容をその場で受け止めることは出来ませんでした。スタッフが書き留めてくれたものをいただき、何度も読んで噛みしめました。その中で「南無阿弥陀仏が、普通名詞から固有名詞の南無阿弥陀仏にかわる」という言葉が印象に残りました。私には葵と楓という二人の孫娘がいます。以前は聞き流したである

う名が、芸能界に葵という人がいれば気になり、近所の楓通りを歩けば孫のことを思い出します。私だけの葵と楓になっていると気づきました。

良い悪いもなく、未来も過去もないという阿弥陀様に照らされ、生かされて生きている私とは、どんなことなのだろう。なぜかふと、ひたむきに草を噛み、繁殖し、静かに死んでいく、ただそれだけに懸命な牛の姿が思い出されました。

死や病におびえ、富や名誉を欲しがる六道を彷徨う私ですが、阿弥陀様の視座をいただく時にその煩惱から一瞬でも救われるのか。一人ひとり事情の違う問題を抱えた私たちに、それぞれの救いが用意されていると思うとほっとします。

スタッフ反省会の際、「仏法は毛穴から入る」ということを聞きました。分からないことに焦り、マイクの不調を恨み、報告書を書く役目を受けてしまったことを後悔していた、正に四苦八苦状態の私でしたが、この一言で「法話を身に浴びたことは確かである」と気づき、なぜか心が穏やかになりました。阿弥陀さんの学校で教えをいただくことで、ゆつたりとした生き方が出来るように思えて参りました。



オンラインでの講義の様子（講師：雲井 一久 氏）

教区教化通信 研修部門

新教師のつどい

テーマ：『真宗大谷派教師として「人」と出会う』

講師：雲井 一久 氏（横浜組 真照寺）

講題：「出遇い—今問われること」

研修部門委員

東京1組 通覚寺 稲垣 和弘

2021年4月29日（木）『新教師のつどい』は『真宗大谷派教師として「人」と出会う』をテーマに開催されました。

参加者は5名。開催形式は、真宗会館での対面参加とZoomでのオンライン参加の両方を予定していましたが、緊急事態宣言下となり講師スタッフを含む参加者全員がオンライン参加での開催となりました。

講義は横浜組・真照寺の雲井 一久氏より、講題を「出遇い—今問われること」としてお話しいただきました。

雲井氏は「僧侶としてどう人と関わっているのか、そこには責任があります」と呼びかけられ、「親鸞聖人における法然上人、お念仏の教えに生きた人との出遇いは仏の本願と

の出遇いであり、生き方の方向転換、人生の意味が開かれたということだ」と「仏に出遇うとは自分に出遇う、自分を知ること」という自分に出遇うのかという凡夫、自己執着から出られない自分です」「出遇えないからこそ、出遇っていくんですよ」とお話しされました。

班別座談では「人との出遇いによって『自分とは違う考え方もある』と気付かされることもある」「自分が納得できない人との出遇いもあります」と意見が交わされました。

日程終了後、参加者からいただいた感想には「仏に遇い自分を知る（自分に遇う）ということですが、私は遇ったつもりになっているだけかもしれないと思いました。自分のことは自分が一番分かっているようで、実は知らないのではないか」とありました。

今回は参加者スタッフ共にオンラインでの開催に戸惑いつつ、今できることを模索しながらの開催となりました。

来年はどのような開催形式になるかわかりませんが、どのような状況であっても、大谷派教師の歩みを振り返り、確かめることの大切さを思う「新教師のつどい」となったのではないのでしょうか。

教区教化通信 研修部門

秋安居

講題：「撰大乘論第十章彼果智分の考究」

第三回 講義テーマ「唯識思想の基本構造とその目的」
講師：宮下 晴輝師（2019年度 本山安居次講 講者）

■『撰大乘論』の組織を通して

唯識全体を概観する

『撰大乘論』全体が唯識思想をあらわしている。
・十の殊勝性があらわす十の道理

- ①アールヤ識がすぐれた依りどころ（所知依）であると仏陀は説かれている
- ②遍計・依他起・円成実の三性がすぐれた相（所知相）であると仏陀は説かれている
- ③唯識性がすぐれた相への悟入（入所知相）であると仏陀は説かれている
- ④六波羅蜜がすぐれた悟入の因果であると仏陀は説かれている
- ⑤菩薩の十地がすぐれた因果の観修であると仏陀は説かれている
- ⑥菩薩の律儀がすぐれた増上戒学であると仏陀は説かれている

⑦首楞嚴などの三昧がすぐれた増上心学であると仏陀は説かれている

⑧無分別智がすぐれた増上慧学であると仏陀は説かれている

⑨不住涅槃がすぐれたその果なる断であると仏陀は説かれている

⑩自性・受用・変化の三仏身がすぐれたその果なる智であると仏陀は説かれている
序分の最後の5節で、①を説くことで諸法の因を明らかにし縁起を説き、②で縁生した諸法の相が説かれる。③から⑧で唯識性に悟入することで、煩惱障・所知障を断じて、六波羅蜜、十地、増上戒学、増上心学において修習し、増上慧学において無分別智を得る。以上の道果として⑨と⑩を得、一切の大乗が円満成就するという。
・境（教）・行・果（証）という組織になっている。

2019年安居次講

『撰大乘論第十章彼果智分の考究』

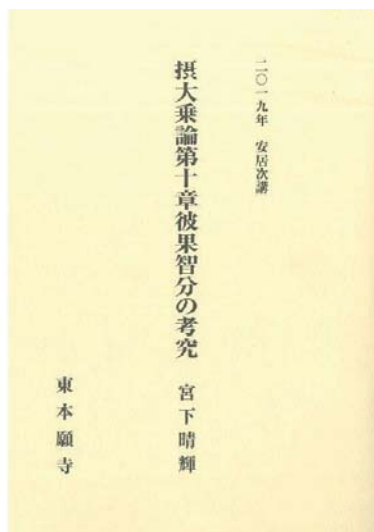
著者：宮下 晴輝（著）

発行年月日：2019年7月4日

ページ数：242ページ

判型：A5

価格：3,850円



この度、ご報告している安居講録です。
ご購入を希望される方は、東京教務所までお問合せください。

☎03-53393-0810

■菩薩地の真実義品における八分別

・菩薩が超えるべき課題とは分別である。『般若経』が新たに見出した仏道の課題が「分別」であり、『大乘莊嚴経論』が引き受けている。

・愚者たちは、この真如をこのように遍智しないが故に、そのために、三つの事態が生じ、一切の衆生と器世間とを成り立たせる、八種の分別が生起する。

・分別が生ずる因は、対象としての諸法に帰せられるのではなく、分別自身に帰せられる。ここに「分別のみがある」という発想が生まれ、「唯識」という発想への接続を見る。

・菩薩によって、四種の如実遍智をよりどころにして八種の分別が遍知される時、現法にそれを正しく遍知するから、未来においてその依事でありその所縁である戲論のなかにある事態が現われることがない。それが生ぜず現われないから、それを所縁とする分別もまた未来において現れることがなくなる。このように、自体とともにその分別が消滅することが、一切の戲論の消滅であると知るべきである。そしてこのような戲論の消滅が、菩薩にとっての、大乘の般涅槃であると知るべきである。これにつづけて、菩薩が自在性

を獲得する。

■アーラヤ識と縁起

・やがて、「分別」が「識」の問題に置き換えられて論じる必要が生じた。「すべては分別のみである」から「すべては識のみである」という表現に変わる。おそらく分別の問題を仏教の基本思想である縁起の領域で論じるためであろう。

・アーラヤ識とは、識自身のうちに自らの原因になる構造があるのだということに認めて成りたった表現である。

・我見や我慢などの染汚意である七識を末那識といい、アーラヤ識は八識になる。

・経験したことがアーラヤ識自身の中に結果(習気)を残し、それが新たな経験の因(種子)となると考える。結果を残すことを、薰習といい、名言薰習、我見薰習、有支薰習の三つでおさえる。

■唯識性への悟入

・所知相(遍計所執、依他起、円成実の三自性)への悟入は、同じく四尋思、四如実遍智

によってである。それは唯識に悟入するといふ意味をもつ。三性に悟入することによって、所縁と能縁とがまったく平等な無分別智が生ずることとなる。

(文責 研修部門)

【研修部門】

今後の予定】

2021年度東京教区

聖典学習会リモート講座

—正信偈に学ぶ—

日 時：2021年8月23日(月)

開催方法：オンライン会議システム

「Zoom」

研修費加金：お一人1,000円

講師 師：一楽真氏

(大谷大学真宗学科教授)

※お申込み、詳細については東京教務所(担当：渡邊楽)までお問い合わせください。

教区教化通信 「同和」協議会

第3回部落問題基礎講座をうけて

テーマ「過去帳閲覧禁止の意味を考える」

講題「過去帳から問われる私」

講師 阪本仁氏（解放運動推進本部 本部委員）

三浦組 浄栄寺 蒲義道

今回の講座は「過去帳閲覧禁止の意味を考える」というテーマのもと、前回講座に引き続き解放運動推進本部本部委員の阪本仁氏にZoomにてお話しいただきました。講題は「過去帳から問われる私」でした。

日々の法務において過去帳に触れる機会は多々ありますが、書かれている個人情報を守秘しなければならぬという認識を強く持っているのか、扱いに常に注意できているのだろうか、振り返る機会をいただきました。

出身地の調査、税務調査や、家系図を作りたいなど…近年に至るまで様々な形で過去帳の閲覧を求められます。差別を助長するようであればもつての他と思っただけでも、研究の為など良いことだからどうしても頼まれ

ると断りにくかったり、時に善意で要望に応じているつもりで開示してしまい、その結果問題を引き起こしてしまうこともあるそうです。自分が良いことをしている感覚には疑問をもつことが無く、ブレーキが利かないという人間の性質は、人ごとではないと思ひ返されます。そういったことの無いよう基本的に

過去帳の取り扱いは、宗派が責任を取る事柄であって、住職の一存で閲覧を許可して良いものではないし、不要なことは記入するべきではないと、強く意識しておかなければならないと教えていただきました。

過去帳は単なる記録ではなく、法名帳であるとも聞いてきましたが、敬意をもって接しているのか、触れるたびに姿勢を問われていると思ひ返さなければならぬでしょう。

身元調査お断りプレートと

過去帳閲覧禁止ステッカー

身元調査は、しないーさせないーゆるさないー！

身元調査お断り

真宗 大谷派



皆さまの寺院・教会ではそれぞれ掲示、貼付されていますでしょうか。寺院・教会の門前や玄関に「身元調査お断り」のプレートが掲示されているか、また過去帳等に「過去帳閲覧禁止」のステッカーが貼付されているかをあらためてご確認ください。

「お問い合わせ先」 解放運動推進本部

TEL..075-371-9247

FAX..075-371-6171

教区教化通信 教学館

私が出遇った言葉

東京5組 心海寺 本多 敬有



傾聴とは

先ず初めに、COVID-19が世界的に流行して一年余り経ちますが、医療現場の最前線で治療、ワクチン接種に尽力されている医療従事者に感謝の意を表したいと思います。

今月の教学館では、三橋尚伸先生が特別講義で「傾聴」について述べられていました。その中で言われていた、メラビアンの法則という実験結果についてのお話が興味深かったです。人間はどこから「相手の話」を感じ取り、読み取るのか。それをパーセンテージにしたところ、身振り手振りの「身体言語」が55%、口調など「声のトーン」から38%、そして「言語」そのものからはたった7%という結果だったということです。改めて人と対面で会うことが難しい今の状況の中、画面越しで相手の話を聞くことの難しさを感じ

てしまいます。

「傾聴」とは、自分の経験や意見を述べてはいけない、傾聴とは「敬聴」でもあります。相手のお話を敬って全身で聴いていく。私は「聴く」「話す」というと、主に言葉を一番に意識しながら聴くことが多く、人それぞれの話し方や相槌、声のトーンや口調などについては日頃からあまり気にしていませんでした。私自身は比較的、人と対話するのが好きな方ではありますが、振り返ってみると、自分の話を一方的にしてしまいがちではないかと思います。相手が話している途中で、自分の経験を語ってしまったり、相手の状況を理解できてないことも多く、また僧侶という立場で、時には上から物を言ってしまうことなどもあります。これは私にとって一番の

課題でもあります。

三橋先生は、「傾聴」とは問題の解決を目的とするのではなく、相手の成長・発達を促進することが重要であり、だからこそ対話の中で常に相手を敬い、相手から教えを頂くという姿勢がとても大切であるとお話しされていました。「話し上手」は「聞き上手」という言葉もありますが、講義を聞いて、人の話を聞くことは一見すると簡単に見えますが、とても難しいことだと感じました。私の名前は「敬」という字が入っています。その「敬」の字にちなんで、これからは「敬聴」に心掛けていきたいと思っています。

第23回 教学館月例研修会(オンライン開催)

2021年5月6日～7日

基調講義…真宗原論

・阿弥陀佛と知の被限定性の臨界点に立ちての私論

西田 眞因氏 (元教学館研究所所長)

特別講義…「聴く」と「聴く」とは、

自己を知り他者を知ることを

三橋 尚伸氏 (産業カウンセラー)

真宗大谷派僧侶

web会議ツール
Zoom 用

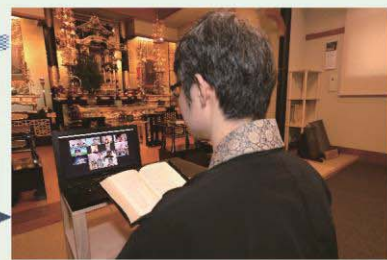
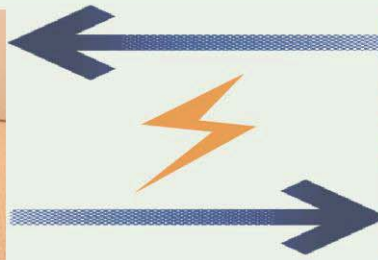
オンライン マニュアル

主催者編
&
参加者編

新型コロナウイルス感染拡大を受けて、オンライン法座を検討されている方々への一助となるよう、東京教区では web 会議ツール「Zoom」用のオンラインマニュアルを作成しました。

ダウンロードしての印刷・配布はもちろん、独自に文字等を変更することも可能です。

どうぞ下記、東京教区ホームページよりダウンロードしてご活用ください。



真宗大谷派東京教区ホームページ (暮らしにじいん)
<http://www.ji-n.net> にてダウンロードできます。

※web版は随時バージョンアップし、アップロードしていきます。

問い合わせ先 東京教務所 (佐々木・渡邊 楽)



児童教化連盟

じれん

参加者・スタッフ

募集!!

春の遠足・夏のキャンプ・子ども報恩講を開催しています
また、児童教化に関する研修会（年2回）も行っています
お子様のご参加、スタッフとしてのご参加をお待ちしています



詳しい活動は
←QR (facebook) を
ご覧ください

お問合せは児連事務局まで

〔東京教区児童教化連盟 事務局〕

〒130-0012

東京都墨田区太平2-7-1本明寺内

TEL 03-3623-1536

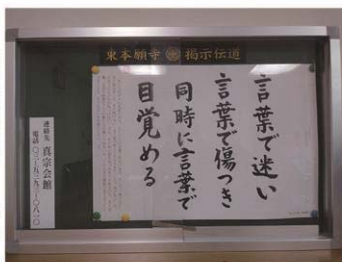
委員長 本田彰一（東京1組）

✉tokyojiren@gmail.com

「門徒宅用伝道掲示板」設置の募集

東本願寺 掲示伝道

・ 掲示板サイズ
高さ58cm 幅87cm 重さ約10kg



③ お申し込み、お問い合わせは東京教務所（担当：粟生）までご連絡ください。

② 掲示板は無償で設置いたします。（教区が全額負担）

① 内容
・ 教区教化委員会発行の法語ポスターや同朋大会等のポスターを掲示していただきます。（掲示物は教区から送らせていただきます）

・ ご自宅の塀等をお貸しいただけるご門徒を募集いたしますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

はい！こちら真宗会館です

駐在日記



駐在からひとこと
写真は伝道講習会より

東京教区駐在教導
渡邊 誉

嘗て一度だけ東京一糸魚川ファストランという自転車専用レースにサポート要員として参加をした。1990年代、新潟に住んでいた頃のことである。サポートとは、今では「ロードバイク」と言われて久しいレース用自転車のスペアタイヤをはじめ、修理道具はもちろん、素早く補給できる食事類、飲料水等を携え、10キロ、20キロ毎に先回りし、安全な場所にサポートカーを停車させ、レーサーを待ち受ける。まさにアシスト係だ。半年目に自転車好きの友人二人に懇願され引き受けた。東京一糸魚川のファストランは今現在も開催されている。当時と今では出発点、ゴール、コースは若干違うが基本は国道20号線、国道148号線を駆け抜ける。前日に八王子市内に宿泊し、翌朝5時高尾山口駅に集合、出発した。大垂水峠、笹子トンネル、富士見峠、塩尻峠を越えて安曇野、大町からは、なだらかだが、延々と続く白馬村まで上り坂。そこ

からはカーブ、洞門が連続する急こう配を一気に降り、根知谷から川尻小谷線に右折知する。最後の力を振り絞り、糸魚川シーサイドバレースキー場がゴールとなる。正確な時間は憶えていないが二人とも高記録だった。レース後、隣接の施設の温泉に入った。そして生ビール。満足顔の二人を見て、羨ましいとは思わなかった。何故車も電車もあるこの現代に、自転車に乗り過酷なレースに挑むのか、自分の目の前にあるウーロン茶と二人を交互に見ていた。半年前くらい前から練習を積み重ねてきた。西は富山県朝日町、笹川流れを越え、山形県との県境近くまで行ったこともあった。練習はいつも片道で帰りは私が運転する車に自転車を積み込み、帰る手筈であった。練習後のアルコールが格別にうまいとしきりに私に言うが、レースの過酷さを知っているだけに、容易に頷けない私であった。

はい！こちら真宗会館です



東京教務所嘱託
渡邊 楽

担当：教化委員会事務、教学館

好きな食べ物：餃子、辛い系



最近新型コロナウイルスが…と毎日ニュースで流れているのにもすっかり慣れてしまいました。25年間、手洗いうがいとは？の精神で生きてきた不衛生人間の私にとって、新型コロナウイルスは生活をがらりと変えてしまいました。

今思えばマスクもせずにぎゅうぎゅうの満員電車に乗り、誰が触ったかも分からない吊革を握り、そのままの手で食事をしていたと思うとぞっとします。

また、昨年から無観客でライブをするアーティストも増えてきたように感じますが、過去のライブ映像を見ると、人がぱんぱんに密集した会場で、大きな声を出している観客を見ると今じゃ絶対ありえないなあと感じます。

みんなの衛生感覚が向上したのは良いことですが、少し寂しい感じもあり

ます。

そんな中、最近になって私はハンカチを持つことを覚えました。

理由はどこもかしこもハンドドライヤーが感染防止対策として使用不可になっているためです。普段からハンカチを持ち歩く習慣がない私からするとこれは大ダメージです（真宗会館にはペーパータオルが置いてあります）。

しかし、実際にハンカチを持ってみると、意外なデメリットに気が付きました。それは何度か使うと後半湿ってきてしまい逆に衛生的によくないのでは…と感じてしまうことです。

結局、ハンカチを持ち歩いてみましたが、あんまりよくないかもと最近は感じています。とにかくこれからも手洗いうがいはしっかりしようと思います。

お詫びと訂正

『ネットワーク9』6月号(371号)にて誤植がありましたので、訂正しお詫び申し上げます。

4頁 下段 後ろから6行目

誤 「真宗大谷派開教会」

正 「首都圏大谷派開教会」

(訂正文)

「開教部門」は、当時、単身で開教活動をされていた開教者の方々を少しずつ繋げ、その繋がっていく地盤を作るような動きから始まったように思います。そして、それは今の「首都圏大谷派開教会」設立に繋がっていきました。「開教」というと、既存の寺院には関係ないように思いますが、仏事、特に葬儀の現場を考えると、首都圏での執行は共にその現場を担っているわけです。

『ネットワーク9』

編集部からの「報告

この度『ネットワーク9』編集部に於いて、チーフの交代がありましたのでご報告いたします。

朝倉班 チーフ

旧：朝倉 俊隆 (東京5組 報土寺)

新：中村 晃 (茨城1組 妙安寺)

↓よって班名を「朝倉班」から「中村班」に変更

鞠川班 チーフ

旧：鞠川 卓史 (湘南組 正恩寺)

新：田宮 真人 (東京8組 究竟寺)

↓よって班名を「鞠川班」から「田宮班」に変更

以上

今後とも『ネットワーク9』のご愛読をお願いいたします。

『ネットワーク9』編集部



如信上人御廟所 法龍寺 榧

敬弔

大住 益栄 様

湘南組 法閑寺 前坊守
4月27日命終 92歳

生前のご功勞を偲び、
念仏合掌して哀悼の意を表します。
5月末日届出迄

涌ゆう

編集員の随筆



氣候が暖かくなり、草木が生い茂る季節となってきた今、私は草と戦っている。草刈機や除草剤といった手段を用いて徹底抗戦をしている。キレイに草が刈れたかと思っていると、その一週間後には新たな緑がまた頭を出している。境内を箒で掃いても、風が吹けば葉が吹き溜まりに集まっている。苦勞して除草剤を撒いても、葉が効かずには何食わぬ顔をして鎮座している。この終わりのない戦いがまた今年も始まったのかと頭を抱えている。そんな草に悩まされている私だが、逆に草木に感動させられることがあった。先日、本願寺第二代如信上人の御廟所である茨城県大子町の法龍寺にお邪魔することがあった。その境内で如信上人お手植えの榧かえと覚如上人お手植えの銀杏に出会ったのだが、その雄大さに感動をしてしまった。ここ数日降った雨のおかげで境内を埋め尽くす苔たちが活き活きと綺麗な緑色に輝き、木々の新緑が空を

覆い、何とも言えない空間を作り出していた。ここだけがずっと何も変わらずに存在してきたかのような場所であった。

今回の特集取材の中で石川氏が「花に対して和花や洋花と選んでいるのは私達であって、花からしてみれば花は花だ」とおっしゃっていたことがとても頷けた。都合の悪い草を刈り取りつつも、草木に感動をしている自分に矛盾を感じた。草木は自分にできることを一杯にやっているだけなのだろう。あとはこちらのご都合主義が問題なのである。

「人知るもよし 人知らぬもよし 我は咲くなり」という武者小路実篤むしやのこうじ さねあつ氏の詩から娘に「花」と名付けた。草花の姿を描いたこの詩に感動し、娘に願いをかけた。しかし、これは私自身も抱えている願いなのではないのだろうか。境内に増える緑を眺めながら、終わらない戦いに頭を抱えている。

(茨城1組 妙安寺 中村 晃)